『形の科学百科事典』が毎日出版文化賞

編纂の徳永英二経済学部教授『受賞で『形』がつきました』

■村上龍『半島を出よ』などと一緒に　徳永英二経済学部教授が編集委員の1人として編纂にあたった『形の科学百科事典』（朝倉書店）が第59回毎日出版文化賞を受賞した。同賞は優れた出版物の著編者、訳者、出版社に贈られる。昨年11月の選考で、村上龍著『半島を出よ』（幻冬舎／文学・芸術部門）や松本健一著『評伝北一輝』全5巻（岩波書店／人文・社会部門）などと並んで、「企画部門」で選ばれた。

『形の科学百科事典』は、約200人の専門家が、神経細胞や花火、雪の結晶など多様な「形」について解説している。大きな分類は「生物と形」「物理と形」「天文と形」「数学と形」「工学と形」の5つ。360項目を収録し、1項目が2～4ページで構成され、図版も多く読んでいて面白い。全903ページ、5年がかりで完成した。解剖学者の養老孟司氏は「自然が示すさまざまな形を、科学の面から解析する試みの、現在での集大成」と帯で推奨している。

徳永教授は刊行決定時に「形の科学会」の会長をつとめ、編集委員の1人として全体作業にあたる傍ら、自然地理学の専門分野で「流域のかたち」などの項目を執筆している。

■予想外の…　経済学部の共同研究室で、徳永教授に受賞の感想を聞いた。「（受賞は）全く予想していなかった。既成の学術賞に該当するような学問ではないと思っていたから。賞には縁がなかったしね」と、笑みがこぼれる。そして、「『形の科学会』は様々な学問分野の寄せ集めではないということが、一般の人にアピールできたことが、受賞の大きな意味ですね」と喜びを語った。

同学会は、医学的研究の「ステレオロジー」と「形の物理学」の2つの流れが合同して生まれ、昨年設立20周年を迎えた。「形の科学会誌」（年3回）とは別に英文電子版「FORMA」（年4回）も発行している。徳永教授は00年6月から04年6月まで会長をつとめた。

編集面での苦労は？　「こういうふうに書け、というスタイルは決めずに、みなさんに自由に執筆してもらった。ただ刊行を構想したのが98年でしたから、会長在任中の最後の仕事として04年5月に刊行の決定をし、その年8月に刊行されました。あまり時間をおくと、原稿が古くなったりしますからね」。調査や新研究で原稿との〝落差〟も生まれる。このへんが時間と人を要する事典編纂の難しさである。

「かたち」という言葉にもこだわる。「形の科学会」が英語で本を出版したとき、「形」を「KATACHI」と表記したタイトルを使った。「『形』は、英語の『form』『shape』などたくさんの『かたち』を含んだ言葉。そんな『形』ということばをアピールしたかったからなんです」

■「形」の奥深さ　「形」の持つ奥深さをこう語る。「河川の流域の形を調べていくと、それが血管の枝分かれや神経の枝分かれなどに関係していることが分かった。また、最近では地震の予知にも応用できることが分かった」。一見、無関係とみえる分野であっても、いろいろな現象がつながっているという。そうした研究から、私たちの身の回りのものに応用され始めている例もあるようだ。

北海道で行ったシンポジウムの中の市民講座で、雪の結晶を取りあげた。「子供たちがとても関心を持ち、楽しそうにしていたことが強く印象に残っています。多くの人に、もっと『かたち』に興味を持ってもらいたいですね」と徳永教授は話した。

（学生記者　池田園子＝法学部2年）